

「本質主義」に異を唱える

「日本女性はおしとやかだ」とか「日本人は勤勉だ」とかいった、本質主義的な考え方（日本人を一般化しやすい傾向）が根強いこの国に一石を投じたい。

「オーセンティシティ」という言葉がある。伝統芸能から伝統料理まで、ある文化の担い手がどれだけ「本物」らしいかを問う用語です。「正統性」「正統的」とでも訳すのだろうか。たとえば、歌舞伎を見て、この役者の演技は「オーセンティックだ」といえば、誉め言葉になる。きちんと昔から代々受け継がれてきた演技の基本を習って、自家薬用中のものになっていると思われるからだ。あるいは、日本舞踊や日本料理やフランス料理やクラシック音楽でも同じだろう。

日本人の中には、歌舞伎や日本舞踊といった日本文化は日本人にしかわからないと考えている人がいる。また、フランス料理はフランス人にしかわからないというフランス人もいるし、クラシック音楽はヨーロッパ人にしかわからないというヨーロッパ人がいる。そういう考え方をする人のことを「本質主義者」と呼ぶ。

あるカテゴリーに属する人がみな同じ本質を持っているとみなす思想だ。そういう「本質主義者」にとっては、外国人の踊る日本舞踊などは嘘くさく（つまり、非オーセンティックに）思えてしまう。日本人のつくるフランス料理も、アジア人の演奏するクラシックも同様だ。

アフロキューバ文化の問題に話をむけると、アフロ宗教の「サンテリア」や「パロ・モンテ」は誰のものか、という議論がある。もちろん、それらのルーツはアフリカだ。しかし、カリブ海にやってきて、アフリカの黒い神々は「文化変容」を余儀なくされた。

「本質主義者」のキューバの黒人たちは、カトリック教会の教義との「習合」を否定的に考え、自分たちの宗教にどれほどアフリカ性が残っているかを強調しようとする。かつて「ネグリチュード」というアフリカ回帰の思想があったが、アフリカ中心主義（アフロセントリズムと呼ばれる）は白人ヨーロッパ中心主義（ユーロセントリズム）の裏返しです。フランツ・ファノンは、「西欧文化の無条件の肯定につづいて、アフリカ文化の無条件の肯定がやってきた」と、ネグリチュードを回想している。

いま、いまや「サンテリア」や「パロ・モンテ」はアフリカ系の黒人のものだけではない。私のババラウォ仲間にも、キューバの白人（スペイン系）はいる。メキシコやパナマ、スペインやベネズエラから修行にやってくる白人たちもいる。だから日本人だからと言って、ババラウォになれないわけでもないし、ババラウォとしておかしい（非オーセンティ

ック) なのではない、と私は思う。あるのは、研鑽を積む良いババラウオと、そうでないババラウオの違いだけだ。

そんなわけで、私は「非本質主義者」なので、外国人の横綱でも、一流料理店の外国人の板前でも、日本人と同様の、あるいはそれ以上の価値を認めている。なぜならば、かれらは日本人以上の努力を要求されたり、鍛錬を経てきたりしたことが容易に想像できるからだ。

アフロキューバ宗教は、いわばキューバの周縁に追いやられた「他者」の文化だ。私がそれを論じる際に、その遠い射程として日本における「他者」の文化への目配りもなければならぬと感じる。なぜなら、コロナ禍によって日本社会の歪みがより鮮明になり、社会・経済的に弱い「他者」(非正規雇用者や外国人労働者、難民) がより社会の周縁へと追いやられているからだ。コロナウィルスへの感染リスクもそういった人々のほうが高いはずだから。

アフリカン・ディアスポラ文化の変容

キューバと言えば、誰しもが思い描くのは、燦燦と輝く熱帯の太陽とまぶしいほど白い砂浜、ハバナ市内を疾走する一九五〇年代のアメリカン・クラシックカー、「ソン」のリズムに乗って踊るサルサといったイメージでないだろうか。いずれも、キューバ政府が推し進める観光産業にマッチした明るいイメージばかりだ。

ところが、キューバには一般の観光客の知らない世界があるのだ。アフロキューバの世界だ。なぜアフリカ由来の宗教や文化を論じるのだろうか。

第一に、それはキューバのナショナル・アイデンティティにかかわる。ヨーロッパ(スペイン系)とアフリカ(それに若干の先住民)が混ざった「混交文化」だ。

長らくキューバの白人支配層はヨーロッパにつながりを見いだそうとして、自国の黒人文化を無視していた。しかし、彼らは自分たちの文化がヨーロッパのそれにはなりえないので、そのことに劣等感を抱いていた。同じくキューバの黒人たちも、白人支配層が作りだした劣悪かつ非人道的な「奴隷制」の犠牲になり、その上、黒人を劣った人種とみなす、白人による科学を装った「人種主義(白人優越主義)」を、自らの中に「内面化」してしまい、自分が白人でないことに劣等意識を植えつけてしまったのだ。唯一、黒人でありながら自尊心を持っていたのは、植民地のプランテーションから脱出して抵抗した「逃亡奴隷」だった。

十九世紀後半から始まるキューバの独立運動では、白人や黒人の区別なく、キューバ人として宗主国のスペインと戦った。それが「独立の父」と慕われるホセ・マルティ（一八五三―一八九五）の信条だ。しかし、マルティより先に東部サンティアゴではアントニオ・マセオ（一八四五―一八九六）という、軍事的・政治的にすぐれた黒人指導者が出現している。おそらくそうした出現の下地を作ったのは、キューバ東部における「逃亡奴隷」の歴史だった。

大衆向けの歌や踊りといったキューバ独自の文化の根底には、アフリカの要素が大きくかかわっている。一例を挙げるならば、十九世紀末に東部のサンティアゴ近辺で発生した「ソン」は、いまやキューバを代表する歌謡形式である。

この伝統的な音楽は、二十年以上前にアメリカ人ギタリスト、ライ・クーダーが火をつけた「ブエナ・ビスタ・ソーシャル・クラブ」で全世界的な人気を博したが、まさにヨーロッパとアフリカの融合したハイブリッドな音楽である。ヴォーカルが歌うスタイル、デシマという十行詩で書かれた歌詞が韻を踏むこと、ギターがメロディを奏でたりすることなどはスペイン風だが、クラーベやパーカッション（ボンゴ、マラカスなど）などでリズムを刻んだり、コール・アンド・レスポンスの掛け合い（「モントゥノ」と呼ばれる）がでてきたりして、アフリカ色（コンゴ系・バンツ語系）の強い音楽だ。一九二〇年代に米国の RCA ヴィクター・レコードでヒット曲を出して商業的な成功を収めたトリオ・マタモロスや、ギターやトレス、ベース、ボンゴ、マラカス、クラーベスなどの六人編成バンドとして代表的な楽団のセステート・ナシオナルから始まって、二〇年代から五〇年代にかけて全盛期を迎える。一時期トリオ・マタモロスにも所属していた天才歌手のベニ・モレをはじめとして、数々のスターを生み出してきた。

いっとき「ソン」は下火になったものの、天才ピアニスト・チューチョ・バルデスに率いられたイラケレや、フアン・フォルメルに率いられたロス・バンバン、現代のポピュラー音楽界のスターのアダルベルト・アルバレスのグループなどによって、「ソン」は完全復活を遂げた。このことはアフリカのリズムや言葉がいかにキューバ社会に溶け込んでいるかをしめす証しにほかならない。アフリカにルーツを持つ詩人たちにも、それは大きな影響を与えてきたのであり、たとえば、ギジェンの詩にそれは見られる。

「ソン」はキューバの奴隷制廃止後に発生・発展したものだが、東部のコンゴ系・バンツ語系たちの間でいまでもおこなわれている太鼓をつかった憑依儀礼ベンベに、そのルーツのひとつがありそうだ。ベンベではメロディを奏でる楽器はつかわないが、太鼓や鉦

という打楽器をつかってリズムを刻み、単純な歌詞をヴォーカル（司祭や祈祷師）が即興でアレンジして、参加者とコース・アンド・レスポンスで歌を延々と繰り返して一座に興奮と恍惚状態をもたらす。奴隷制の時代には、アフリカの黒い神々と一体となるこうした歌と踊りの機会は貴重だった。身ぐるみ剥がされて新大陸に連れてこられて、物質的に恵まれない艱難辛苦の生活を強いられるなか、こうしベンベこそがこのかれらに現世で生きる意味や動機を与えてくれたからだ。

そういう意味では、アメリカ南部の黒人奴隷やその末裔にとっての「黒人霊歌（スピリチュアル）」と同じ機能を果たしていたといえるだろう。

フェルナンド・オルティスの『キューバの対位法——タバコと砂糖』（一九四〇年）は、序文を寄せたイェール大学教授の人類学者のマリノフスキーによって「歴史的かつ社会学的調査の傑作」と称されたものだが、この本の中で、オルティスは「トランスクルチュラシオン（文化変容）」という新語を使っている。複数の文化が衝突するときに、支配的な文化がもう一つの文化を飲み込んでしまうのではなく、むしろ支配的な文化もまたもう一つの文化から影響を受けて、二つの文化が互いに「文化変容」を被るというものだ。

それをキューバの白人ヨーロッパ文化と黒人アフリカ文化に当てはめてみれば、白人のカトリック教会がアフリカの宗教を抑圧し、飲み込んでいるように見えても、実はキリスト教も黒人の宗教の影響を被っているし、黒人のそれもキリスト教の影響を被っている。それは一種の相互作用で、学術用語で「シンクレティズム（習合）」と呼ばれるものにあたる。

「アフリカン・ディアスポラ」の最新の研究は、考古学の分野でおこっている。米国の南部からカリブ海域を経て、南米（とりわけブラジル）までにいたる、奴隷貿易でアフリカから連れてこられた「難民」たちは、従来、ヨーロッパ的視点（二分法）で、主人と奴隷という風に定義されてきた。しかし、二十世紀後半に、それまでユダヤ人に適応されてきた「ディアスポラ（離散）」という概念を、ユダヤ人と同じように故郷を失って根なし草の状況を経験したアフリカの民たちにも応用する研究があらわれ、それを「アフリカン・ディアスポラ」と呼んでいる。とりわけ、先行する文化人類学や歴史学や言語学の分野で「逃亡奴隷」が「抵抗」の秘密基地とした「聖域」の研究が進んだが、十六世紀から十八世紀にかけての文献がほとんどない。あったとしても、それはペンを持つヨーロッパ人の残した手記や日記、「公的記録」だ。そうした文献資料の欠如や不足を補う形で、今、とても刺激的な「アフリカン・ディアスポラの考古学」があらわれ、かつての被抑圧者の共同体をめぐる謎の解明に取り組んでいる。